

調査研究報告

秋元子爵家旧蔵「東海道絵巻」(二)

一 はじめに

郵政歴史文化研究会第五分科会では、令和五年度から郵政博物館資料センターで収蔵する秋元子爵家旧蔵「東海道絵巻」(以下「東海道絵巻」と省略)写真の本格調査研究を進め、本研究紀要の前号で第一回の報告を行った。

今年度当初、旧東海道沿道の自治体教育委員会文化財担当部署と博物館・美術館、及び街道絵巻を収蔵し、調査研究成果のある博物館・美術館など関係機関に調査報告の抜刷を送付した。これまで、研究会では同様な絵巻の存在の有無を把握していなかった。一般的に絵画資料は、いわゆる本歌のような親本があり、それを元に描かれることがある。「東海道絵巻」にも先行する絵巻の存在がわかれば、製作過程や時期などの情報を得られると考えたからである。しかし、残念ながらというか幸いにしてというべきか、未だ関係機関からは、情報が寄せられていない。このことは、「東海道絵巻」は、オリジナルに描かれたことを想定させるものかもしれない。

二 記載場所と制作年代の推定

前回に引き続き「東海道絵巻」に貼付された金紙短冊から、記載された地域と、その場所からいつ制作されたのかを検討する。

(一) 金紙貼紙

今回は、第一五紙から第二〇紙までの記載内容からみても。

画中貼紙

場所

第15紙 小田原より箱根へ三里廿八町

竹下山

竹下山

小田原

小田原宿

太閤御ぢんは

太閤御陣場(石垣山一夜城)

天神

天神(一夜城の奥?)

杉山 正司

山本 光正

波多野 純

第16紙

入りうた村
とうのさはゆ
ゆもとのぢそう
宗雲寺
ふたこ山
はたのちや屋
もとはこね
かしの木
ごんけん
ぢそうたう
さいのかはら
はこね水うみ
ほうてうとの城あと
箱根より三島へ三里卅町
御番所
とうけ
御殿
第17紙
さかみいつのさかい
にら山
ふる城
山なかちや屋
ふる城
伊づほうでう
山なかちや屋
ひるかこしま
一柳□□のかみ
山なかふるしろ
かりかいはし
三島より沼津へ一里半

入生田村
塔ノ沢湯(塔ノ沢温泉)
湯本の地蔵
早雲寺
二子山
畑の茶屋
元箱根
榎の木(榎木平?)
権現(箱根権現・現在は箱根神社)
地藏堂(元箱根)
賽の河原
箱根湖(芦ノ湖)
北条殿城跡(屏風山砦?)
御番所(箱根関所)
箱根峠
相模伊豆の境
葎山(伊豆の国市)
古城
山中茶屋(接待茶屋?)
古城
伊豆北条(葎山周辺?)
山中茶屋(接待茶屋?)
蛭ヶ小島(伊豆の国市)
一柳伊豆守?(宗閑寺内墓所)
山中城
(三島宿に入る新町川に架かる橋
か?大橋・新町橋とも)

第18紙

みしま
三しま明神
御殿
せんくわんとひ
伊づするかのさかい
しんまち
なかさわ
きせかわ
きせかわ村
つまめくわんおん
かまかふち
しもいしたむら
わし津
さんわう
とくら山
ぬます
沼津台原迄一里半
せんほん松
せんほう寺御てん道
大すわ村
興国寺
かまとむら
ふるしろ
松長寺
新田
はら
原台吉原へ二里十六町
うきしまかはら
かしはき

三島宿
三島明神(三島大社)
三島御殿
千貫樋
伊豆駿河の境
新町(新宿村?)
長沢(長沢村)
黄瀬川
木瀬川村(沼津市)
鶴亀観音(亀鶴の塚・亀鶴山観音寺)
釜ヶ淵?
下石田村
鷺津(鷺津山)
山王(日枝神社)
徳倉山
沼津宿

千本松原
(?鳥居は浅間社?)
大諏訪村(沼津市大諏訪)
興国寺(真如寺)
?
古城(興国寺城?)
?(現在確認できず)
松長村
原
浮島ヶ原(名所)
?

あまのかく山	天香久山（天香久山砦）
あしたか山	愛鷹山
もとよしはら	元吉原
さんおう	山王（日枝山王社・伝法村）
ふじ山	富士山元
よしはら	吉原宿
とら御せんのはか	虎御前の墓（富士市）
そが	曾我（曾我八幡？）
ひぐちむら	樋口村
尼宮	？
弟宮	？
うるい川	潤井川
たけむら	？

（二）貼紙記載場所の特徴

第一五紙からは、第一四紙迄とは貼紙記載場所に若干の差異が認められる。第一紙から第一四紙の間でも多少はあったのだが、ここから遠方の場所の記載が顕著になってくる。東海道からは、おそらく見ることが出来ないであろう場所の記載が目立ってくる。

石垣山の一夜城の奥にある天神、葦山、伊豆北条、蛭ヶ小島（伊豆の国市）、興国寺などである。特に伊豆半島の所在する葦山、伊豆北条、蛭ヶ小島の地域は、源頼朝と鎌倉北条氏に関係している点があげられる。

さらに第一六紙と第一七紙にあつては、小田原北条氏の遺跡、「古城」などまでもが詳細に採られている⁽ⁱ⁾。また第一九紙の興国寺や古城する興国寺城なども、小田原北条氏の祖である伊勢新九郎盛時（早雲）旗揚げの地として重要な場所である。しかも興国寺城は、先にあげた葦山へ早雲が移るまでの居城であり、関連する葦山の記載も首肯される。また小田原城攻めで奮戦して討死をし、宗閑寺内に墓がある「一柳伊豆守直末」の名を記している。

この件だけからの推測にすぎないが、前回「東海道絵巻」制作は、秋元喬知関与を指摘した。秋元家の系譜⁽ⁱⁱ⁾では、喬知の祖父である泰朝は、天正一八年人質として小田原城にあったことが記されている。そもそも秋元氏の祖である元景（景朝）は、深谷上杉氏に仕えていた。主君上杉憲政（氏憲）が、北条氏政の養女を正室に迎えたことにより、深谷上杉氏は小田原北条氏との関係ができ、当然秋元氏も同氏と誼を通じる関係にあったであろう。長朝の時、豊臣秀吉の小田原攻めがあり、氏憲が小田原城に籠り、長朝は深谷城の守将となった。この時、子の泰朝は、小田原城に入質となったというが、幕府に提出する『諸家譜』への記載で小田原北条氏との関係を疑われることを危惧して、あえて人質とした可能性もあり、単に父の名代として氏憲に従ったのかもしれない。このような秋元氏と小田原北条氏との結びつきが、関係するのではないだろうか。

勿論、この両北条氏の関係性はないものの、この一連の場所の記載は、小田原から箱根山中の小田原北条氏の遺跡はもとより、鎌倉北条氏に関連するということで遠方の伊豆の地も採用を指示したと考えたい。

さらに東海道に接した三枚橋城は、小田原北条氏と対峙した武田勝頼が築城したと伝えられる重要な城にもかかわらず、古城としても記されていない⁽ⁱⁱⁱ⁾。小田原北条氏に関わらない武田氏の城ということで、あえて無視されたのではないだろうか。

ここから類推されることは、繰り返しになるが直接の関係は無いものの、鎌倉北条氏と小田原北条氏とは、単に「北条氏」という姓つながりから、秋元氏と関連する情報として採用するよう指示したのではないだろうか。

（三）記載場所からの年代情報

次に、「東海道絵巻」に記された建造物や構造物など建立年代についてみていく。前回同様に絵巻が描かれた同時代に、存在しない建造物は当然描かれないはずであるが、廃絶した建造物や構造物は、象徴や当時の人々の心象風景にもなって描かれていることは既に述べたとおりである。

ここでも同様に、小田原北条氏関連を含めて天正一八年（一五九〇）以降を中心に、建立年代を列挙する。

小田原宿 慶長六年(一六〇二)設置
 元箱根 元和四年(一六一八)以前?
 御番所 箱根関所 元和四年(一六一八)設置
 古城 天文一四年?
 一柳伊豆守 天正一八年(一五九〇)、小田原攻めで一柳直末討死
 三島宿 慶長六年(一六〇二)設置
 三島御殿 元和三年(一六一七)寛永一二年(一六三六)頃廃止
 沼津宿 慶長六年(一六〇二)
 興国寺 天文一八年(一五四九)初出 築城に伴い蓮光寺境内に移転、真如寺とする。
 古城 興国寺城? 慶長一二年(一六〇七)廃城※実際は興国寺城は、原の後のはずだが?
 新田 松長村、元禄一一年(一六九八)小田原藩主大久保忠朝二男教寛が、新田六千石分与?
 原 慶長一四年(一六〇九)
 元吉原 寛永一六(一六六九)洪水移転
 ↓延宝八年(一六八〇)大津波再度移転
 吉原 天和二年(一六八二)移転

(四) 貼紙記載場所から推定される制作時期

前回では、芝罎魔堂(増上寺塔頭宝珠院)の開創が、貞享二年(一六八五)であることが、最も貼紙の記載場所の下限であった。

今回の第二〇紙迄では、第一九紙の「新田」がポイントとなる。この新田は、小田原藩主である大久保忠朝の二男教寛が、元禄一一年(一六九八)に松長村に新田六千石が分与されたことにより開かれたのであるが、この記載が芝罎魔堂開創より一三年下ることとなり、最も下限年代である。

さらに同じく第一九紙からは、貴重な情報を得ることができる。三枚橋城(古城)の廃城後、古城のほど近くに安永六年(一七七七)に水野忠友(二万石)によって新城として沼津城が築城される。東海道に接した城は、小田原城をはじめ駿府城、浜松城、吉田城などがあり、「東海道絵巻」で

は必ず描かれているが、沼津城は譜代の城でもあるにも関わらず描かれていない。このことから「東海道絵巻」が、制作された時期は、少なくとも安永六年(一七七七)以前であることが考えられる。築城には数年要することを考慮すれば、さらに数年程度遡ることになる。

第二〇紙までを対象とする小稿では、元禄一一年(一六九八)から安永六年(一七七七)の七九年の間に制作されたと考えたい。この間は、「東海道絵巻」の所用者とされる秋元喬知の老中襲職から禁裏造宮奉行として京都滞在期間と重なり、喬知の関与の可能性が高くなった。

(i) 「東海道絵巻」では、沿道の城名は貼紙では記されていない。宿場名を記すことで、何処の城かわかるためあえて記さなかったとみられる。したがって、小田原城にも城名の貼紙はない。

(ii) 『寛政重修諸家譜』第十五卷(第九百五十八)

(iii) 三枚橋城は、武田氏滅亡後に、徳川方の城となり家康四男忠吉が入り松平康親が貢献となった。一時豊臣方の中村一氏が入ったが、関ヶ原合戦後大久保忠左が二万石で封じられた。慶長十九年廃城となるが、この後新城として安永六年(一七七七)に水野忠友(二万石)が沼津城を築城する。

(以上、杉山)

三 絵巻の考察(その一)

東海道絵巻に関する三回目研究会である。今回の発表のための調査・分析において最大の成果は絵巻作成に大きな影響というか、絵巻作成のベースになったとみられる資料の一つを突き止めることができたことである。勿論まだまだ検討の余地があることは言うまでもないが。

その資料は井原西鶴の『一目玉鉞』である。このことに気づいたのは今回の発表の原稿作成の終盤に入ってからのことであるため、詳細な検討は行っていないことを断っておく。

尚、これまでも、これからも検討の過程を記すつもりだが、それは絵画

資料を近世交通史の資料とするための方法論を模索するためであり、後進の研究者の参考になればと思つてのことである。

(一) 『東海道絵巻』と『東海道分間絵図』の比較

『東海道絵巻』の成立年代は不明であるが、『東海道絵巻』と近接する時代に刊行された東海道図が幾つかあるものの、いづれも地図的要素が強い。そうした中で地図そして絵画の両面から描かれたものが『東海道分間絵図』であるが、ここで両者を簡単に比較しておこう。

○郵政資料館所蔵『東海道絵巻』

『東海道絵巻』は写本で卷子仕立。地図の機能よりは「絵画」に重点を置いていようである。但しこれについては全巻を確認分析する必要があるが、この時点では「絵画」として見ていくことにする。

沿道の建物は箱を並べたようなものではなく詳細に描かれ、人物も生き生きと多数描かれており街道の様子や旅人の動きを楽しむことができる。

『東海道絵巻』の特徴の一つは將軍休泊用の「御殿」や「御茶屋御殿」の全てかどうかは断定できないが、描かれていることである。『東海道絵巻』執筆当時御殿が現存していたとは考えられないが、現存する御殿を見て描いたかのである。推測で描いたのか、何らかの資料を基に描いたのか不明だが絵巻を分析する上で大きな鍵になるかもしれない。

『東海道絵巻』では沿道の建造物などがスペースの関係で実際の場所に描くことができないときは、適当なところに描いている。その時は実際とは異なるということを示すためか、建造物を金雲で囲んでいる。江戸品川間の寺社などの位置がおかしいのもこのためである。新居宿の御殿は街道左側に位置していたようだが、画面上部に描かれ、金雲に囲まれている。

○『東海道分間絵図』

本絵図は遠近道印・菱川師宣により元禄三年に出版されたものである。沿道の建造物などはパターン化されている。人物も描かれているが、地図としての機能が大きいいため、人物などを街道からはみだすほど大きく描く

わけにはいかないので小さく描かれている。地図としての機能からか、当時あつた一里塚はほとんど描かれているようである。その一方「御殿」等は描かれていない。このことは東海道図を見るうえで大きな意味を持つであろう。『東海道分間絵図』が作成されていた頃、御殿が少しでも残っていれば描いたのではなからうか。多く残る東海道絵巻の写本には「三島御殿」や「新居御殿」が描かれているから、描くことを憚ったとは思えない。『東海道分間絵図』作成当時御殿は消滅していたということであろうか。両者の検討はさらに行わなければならないが、遂次検討を重ねていくことにする。

冒頭に述べた『一目玉鉾』と『東海道絵巻』との関連については街道沿いの分析の中で述べていくことにする。

(二) 街道に沿って

① 馬入川・平塚

馬入川手前には大山道が描かれ、参詣に向かうと思われる笠を被った二人の旅人。山の方からはやはり二人の旅人が下つて来る。川沿いには旅人相手の茶店。

この辺りの描き方、特に大山への道の情景は『一目玉鉾』をそのまま引き写したようにも見える。

馬入川右岸、江戸側には旅人が船に乗り込んでいるところが、対岸には岸を離れた渡船が描かれている。客は四人。画面上部に「大山不動」の建造物が描かれているが、この描き方の基になるのは『一目玉鉾』のようである。

馬入川を渡り八幡に入る。八幡は現在の平塚市の八幡である。『東海道絵巻』の画面上部に「ごんげん」とあるのが平塚八幡のようである。この辺りの描写も『一目玉鉾』と酷似している。

犬を連れた旅人が西に向かっている。振り返って犬を眺めている人物もいる。犬を連れているのは明らかに旅人である。近世の随筆などに犬の伊勢参宮の話があるが、旅人の連れている犬は伊勢参宮を暗示するものなのか。水口宿には首に風呂敷のようなものを巻き付けた犬が描かれている。



『東海道絵巻』 郵政博物館蔵 (山本 写)

皆がこの犬を眺めているが飼い主はいないようである。これも犬の伊勢参宮代参だろう。犬の代参は江戸時代も後期のことかと思っていたが、『東海道絵巻』に描かれているのであれば一六〇〇年代後半にはこのような話があったわけである。

八幡の外れには京方面に向かう飛脚。随走者がいるが、交代要員であるうか。金雲で仕切られ平塚宿の中心部に入る。

② 大磯

花水川を渡って大磯宿に入る。花水橋は絵巻には長さ四三間とあるが、『東海道宿村大概帳』には二五間で高欄付とある。

画面上部に高麗寺が描かれているが、山容や街道沿いの描写の基になったのは矢張り『一目玉鉾』である。

近世後期の絵画などでは腕を伏せたような高麗山が象徴的に描かれるが、これは広重の『東海道五十三次続絵』の大磯宿の影響であろう。

高麗山の下には駕籠とそれに付き従う一行。駕籠に乗っているのは武士階級の人物であろう。さらにその先には笠を被り、羽織を着た三人の旅人。三人の前に挟み箱を担ぎ、刀を一本差した二名がいるが、三人の旅人の従者であろうか。

大磯で多くの旅人が見物するのが、虎が石である。昔大磯の長者に子供ができなため、虎池弁天に祈願したところ夢に弁天が現れた。目が覚めると弁天がいた辺りに美しい石があり、これを仏間に安置したところ虎女が生まれたという。その他諸説あるが、絵巻にある虎の石は浜近く転がっている。

万治年間の刊行と言われる『東海道名所記』には「よき男のあぐればあ

り、あしき男のもつには、あがらずといふ、色ごのみの石なり」とあり、林道春の『丙辰紀行』(有朋堂文庫 日記紀行集 大正四年 一七五頁)によれば、彼が東海道を旅した元和四年当時の虎の石について次のように記している。

此所に曾我十郎が妾虎が旧跡ありとて、一の石を人々集まり見て、もたげ、転ばかしなどして、むかしより虎石と名づけ、今にあり、

さらに小笠原長保の『甲申旅日記』(帝国文庫二二 紀行文集 昭和五年 七八六頁)によれば、文政七年当時の虎の石の扱いについて次のように記している。

此駅に虎子石といふ石の有りと聞きて行きて見るに、四五尺ばかりにて、太刀の疵とて痕あり、こは延台寺といふ寺にあり、



一目玉鉾 二 (山本 写)
とらがいいし

名所や観光見物の対象の扱われ方を見る一つの参考になる。さらに虎石も当初のものではないかもしれない。

『東海道絵巻』に描かれた「虎が石」の状況は『一目玉鉾』から着想を得ているようである。『東海道絵巻』には鉢巻をし、刀を腰にした武士が石を睨み付けている。『一目玉鉾』には石の左右に刀を腰にした二名が石を睨み付けている。

やがて『東海道絵巻』は鳴立沢を渡る。このような絵巻を理解するには古典文学との関係を考えなければならぬが、それについて若干述べておこう。

鳴立沢は言うまでもなく、西行法師が、

心なき 身にもあはれは しられけり しき立沢の秋の夕暮れ

と詠んだ所として知られる。尤も特定の場所を詠んだのではないといわれているが、いつしか大磯と結びつき名所となった。鳴立沢には近世前期に外郎家の隠居が小庵を結んだが荒廃。元禄八年（一六九五）大淀三千風により鳴立庵を再興。本絵巻が鳴立庵再興後に作成されたものであれば絵巻に描いた可能性が高い。

このほか東海道において歌を詠む名所について簡単に述べておこう。

東海道文化の原点は在原業平の『伊勢物語』『東下り』である。そこに取り上げられたのは「八つ橋」「宇津の山」「角田川の都鳥」そして『伊勢物語』に限ったことではないが、富士山である。その後鳴立沢のように様々な名所が作り上げられていく。

『東海道絵巻』ではこのような名所が大きく取り上げられて、然るべきではないかと思うのだがそうでもないようである。「宇津の山」では象徴となる蔦・楓が何処かに描かれているかと思ったが、描かれていないようである。それでも「八つ橋」は八つ橋と杜若が小さく描かれている。

『太平記』の巻二「俊基朝臣再び関東下向の事」は道行文の最高峰であり、東海道文化に大きな影響を与えていることを記しておく。

これまで『東海道絵巻』と『一目玉鉾』の関係について述べてきたが、筆者は今の時点では『東海道絵巻』は『一目玉鉾』を下敷きにして描いたことに間違いはないと考えている。

但し全巻『一目玉鉾』を下敷きにしたかについては比較検討が必要である。一瞥しただけだが、京都周辺は『一目玉鉾』とは全く異なる描き方である。明らかに京都を熟知した絵師、即ち京都在住の絵師が描いたものといえる。

大磯宿以降『一目玉鉾』との比較検討を事細かにする必要はないと考えるが、箱根関所辺りまで部分的に比較しておこう。

③ 小田原宿

酒匂川を渡り小田原城下に入る。『東海道絵巻』には番所そして鍵型に曲がった街並みが描かれ、小田原城下に入る。これまで商家は何を商っているのか分からなかったが、ここでは「うひろう」（外郎）の文字が見える。小田原の外郎は夙に有名ではあったが、ここに「うひろう」と書いたのは、外郎家が中国から京都に渡り、後に小田原に移ったことによるものかもしれない。

これに対し『一目玉鉾』は酒匂川を渡れば直ぐに小田原城下。それも辛うじて小田原城が描かれているという状態である。何かあるのかとおもってしまふ。但し『東海道絵巻』の小田原城の描法は『一目玉鉾』を下敷きにしているようである。

④ 箱根路と箱根関所

『東海道絵巻』では小田原城下左は金雲で仕切られ箱根路が始まる。箱根路は絵巻の流れからでは、右から左へと進むと思うのだが左から右で、一見江戸に戻って行くように見える。『東海道絵巻』では箱根路の始まりは宗雲寺（早雲寺）になっている。早雲寺と次の場面は金雲で仕切られている。これも『一目玉鉾』を下敷きにしたためである。しかし『一目玉鉾』に記された地名は右から左で、右つまり江戸方面から湯本・畑・賽の河原と地名が書かれている。『東海道絵巻』の絵師が間違えてしまったのかも知れない。又は絵師が街道を左から始めて時計回りとは逆に街道が続いているように見せかけ、箱根路の山深さを表現しようとしたとも考えられる。

『東海道絵巻』は早雲寺で金雲により仕切りが設けられるが、その左側は畑の茶屋から箱根関所及び箱根権現へと続いている。それより坂道を下った所に蘆ノ湖を背にして関所が描かれている。これに対し『一目玉鉾』は坂の上に箱根関所が描かれている。関所の位地に関しては『東海道絵巻』の方が正しいようである。憶測であるが絵師が箱根関所を知っていたか、資料を持っていたためであろう。

箱根関所から三島宿まで『東海道絵巻』には山中の様子を詳細に描いて

いる。詳細というのは正確にということではないことを断っておく。一方『一目玉鉾』はこの間を少し描いているだけである。これについては憶測をせず指摘に留めておこう。

おわりに

これまで述べてきたように『東海道絵巻』の下敷きになった資料が『一目玉鉾』であることは間違いないと断定してよいだろう。但し全巻を通して下敷きとしたかどうかについて分析していく必要がある。

將軍休泊用御殿を全て描いているのか、さらに御殿を描いた資料についても探求するべきであるが、それは困難というより不可能かもしれない。『東海道絵巻』の分析によりそのヒントが出て来ることを願うばかりである。

四 絵巻の考察(その二)

はじめに

前回の概報においては『東海道絵巻』の下敷きとなる資料が『一目玉鉾』であることを証明してきた。しかし江戸については『一目玉鉾』だけで説明することは難しい。そこで今回は江戸を描くための資料について検討し、『一目玉鉾』との関連について述べていくことにする。

(一) 絵画資料分析にあたって

① 資料としての絵画

はじめに分析にあたっての前提について述べておきたい。絵画は鑑賞し楽しむものである。ところが多くの研究者は絵画を目にした途端に資料として見てしまう。先ずは無心に絵画を眺め楽しむことだろう。直ちに資料として見てしまったら絵画の表面だけしか分析できないであろう。

絵画を資料として見る時、筆者もそうであるが、直ちに年代を確定しようとする。時には確定することが研究目的のようになってしまう。確かに

年代確定は絵画を資料として分析する上では重要なことであるが、取り敢えず江戸時代も前期・中期・後期程度が分かればよいのではないだろうか。重要なことは絵画から何を読み取りたいのかである。

問題意識に沿って絵画を見ていけば自然に制作年代を絞り込んでいくことができるだろう。筆者が現段階で関心を抱いているのは、『東海道絵巻』の制作過程と描かれた人物像から旅の様相を具体的に浮かび上がらせることができるのではないかとということである。

② 『東海道絵巻』の特徴

江戸時代の東海道を描いた絵画は多数現存している。中でも広重の「東海道五十三次」の続絵が最もよく知られている。このように東海道を部分的に描いた絵画となると枚挙にいとまない程である。

部分的に東海道を描いた絵画に対し、東海道を連続して描いたものはかなり少なくなはなるが、それでもある程度現存している。これに対し東海道以外の街道を連続して描いたものは極めて少ない。それは需要と供給の關係からである。

東海道を連続して描いた絵画は卷子仕立或は折本仕立である。東海道を連続して描いた絵画(ここでは以下東海道連続絵画とする)は全てがといってよいほど地図としての機能を持ったものである。絵地図といってしまってもよいほどである。特に出版された東海道連続絵画は地図の機能が大きい。次にその代表なものを列挙しておこう。

『東海道分間絵図』	元禄三年	遠近道印	菱川師宣
『新板東海道分間絵図』	宝暦二年		
『江戸道中勝景記』	宝暦九年		
『東海道五十三次勝景』	万延元年	五雲亭貞秀	

一方写本の東海道連続絵画は優劣が甚だしい。さらに東海道だけではなく、山陽道から九州方面まで描いたものもある。

東海道連続絵画としてここでは卷子本・折本を取り上げたが東海道図屏風もある。どの程度現存しているのか定かではないし、簡単に見ることができないので除外した。

それでは『東海道絵巻』はどのようなものかということであるが、『東海道絵巻』は絵に重点を置いたものである。絵に重点を置いたものに、国立歴史民俗博物館所蔵の『東海道五十三駅画巻』があるが、東海道の道筋は『東海道絵巻』よりは描かれているものの、絵画として見た場合『東海道絵巻』にはとても及ばない。

それでは『東海道絵巻』は全巻道筋を無視して「絵」に重点を置いたかというところからか地図の要素も強くなってくるのであるが、それは『東海道絵巻』制作の経緯とも関わることなので、次の項で述べることにする。

③ 『東海道絵巻』制作について

最初に『東海道絵巻』の制作については推測の域を出ないことを断っておく。

『東海道絵巻』が元禄頃に作成されたものであれば、作者は京都の絵師ではないかと考えられる。『東海道絵巻』を幕府の御用絵師が描いたとは考えられない。当時の江戸にも民間の絵師はいたであろうが、京都絵師が制作したと考えた方が自然であろう。絵師と言っても一人の絵師が描いたのではなく、工房において何人かの絵師によって制作されたものであろう。これだけ大部な絵巻を一人の絵師が描いたのでは相当の期間が必要になってしまう。

絵師・工房が江戸であつたら江戸城内は不可能だろうが、江戸城周辺及び江戸市中を正確に描いている筈である。それは東海道の描写についても同様である。そこで絵師は『一目玉鉾』を『東海道絵巻』制作のための基本的な資料としたのである。

しかし京都については当然『一目玉鉾』に頼る必要などないわけである。そこで京都市中の部分だけを眺めて見たが明らかに京都在住者が描いたものようである。詳しくはこれから検討分析をしなければならぬ。

一瞥したのは京都市中だけであるが、東海道のどの辺りから絵師が街道

を知って描いたのかを突き止めなければならない。要するに江戸から京都まで『一目玉鉾』を基本資料として下敷きにしたのではないということである。

以上のようなことから、『東海道絵巻』は京都の絵師・工房で制作されたと断定してもよいだろう。

余談になるが、工房で制作ということは例えば江戸から品川までは甲の絵師その次の神奈川までは乙の絵師と区間分担をしたのだろうか。両者が同じように描いたとしても違いが出るだろう。それとも甲は建造物、乙は人物と手分けしたのだろうか。そうなると画面に人物を先に描くのか、建物を先に描くのか、どちらを先に描くにしてもそれでは上手くないだろう。

これに関しては全く無知なので、工房で制作する時の手順について知りたいものである。

④ 江戸城と江戸市中について

ア 『一目玉鉾』と江戸城と江戸市中の描写について

『東海道絵巻』の冒頭は江戸城と城内で、画面の下には市街地は描かれていない。それより少し右に京方面に向かった辺りに町家が描かれ日本橋へと続き街道は市街地を行くことになる。

『一目玉鉾』は一丁目の表に江戸城・城内を画面上部に描き、下部には町家を描き四角囲いの中に「江戸の町屋」と書かれている。一丁目の裏は上部に霞が関・山王・愛宕山・三田八幡を描いている。下部には日本橋、橋を渡った所に高札場が描かれ町家の屋根が続く。中段には雲が描かれその中に常盤橋・桜田・雑司ヶ谷そして神明の宮が描かれ、中段に描かれた町家の屋根には櫓がある。

断っておくが『一目玉鉾』は小さなスペースに描きこんでいるので、町家が続くといっても屋根や家屋が少し描かれているだけである。

江戸城に戻ろう。一見するとこの場面は『東海道絵巻』と『一目玉鉾』の描写は全く異なるように見えるが、構図は『一目玉鉾』を下敷きにして

いるようである。構図は『一目玉鉾』を下敷きにしても、実際に『東海道絵巻』に描かれた江戸城やその周辺は全く異なっている。何らかの資料を参考にしなければならない。現在のところ参考にした資料は以下に掲げたものと考えている。

○『江戸名所記』

寛文二年

浅井了意

○『東海道名所記』

寛文前後

浅井了意

○『古郷帰江戸咄』

貞享四年

著者不詳

『江戸名所記』・『東海道名所記』の著者浅井了意はウイキペディアによれば摂州三嶋江（高槻市）に生まれ壮年期は大坂に住み、寛永末年京都に移住し、元禄四年に没したという。前半生は不明だが江戸にも一時期来たか、一時期居住していたと考えられていることである。

『古郷帰江戸咄』の著者は不詳なので、著者が江戸在住者なのか京・大坂方面なのかも定かではない。本書が収録されている『古板地誌叢書』11（昭和46 藝林社）の解題が難解で理解し難いが、出版及び著者は関西らしい。

このほか参考にしたであろう資料として『東海道分間絵図』を挙げておく。

イ『東海道絵巻』における江戸城の描写

『東海道絵巻』の構図は『一目玉鉾』を下敷きに行っていることは明らかであるが、江戸を描く参考資料とした『江戸名所記』・『東海道名所記』・『古郷帰江戸咄』と『東海道絵巻』に描かれた情景を比較して見よう。

『東海道絵巻』の冒頭は江戸城内へ入る場面である。左手から堀に架かる橋を渡って門を潜る。堀には鳥が数羽浮かんでいる。潜る門は大手門であろうか。門を潜り左に曲がると、江戸城内中心部に入る門を潜る。江戸城の構造についてはほとんど知らない。門の名称は分からないが、この門を潜ると江戸城中心への入口のようである。中心部への入口なので当然のことながら豪壮な構えである。ここに大きな武士が背を向け城内へ入ろうとしている。

この辺りは石垣に囲まれ、城内左に五層の天守閣が聳えている。天守閣は白壁で、左側から描いている。

冒頭の画面を先ず『江戸名所記』と比べて見ると、江戸城天守閣は『江戸名所記』と酷似している。異なるのは『江戸名所記』の天守閣は右側から見て描いたものである。但し江戸城天守閣は明暦三年（1657）の明暦の大火により焼失しその後は再建されていない。

浅井了意はことによると明暦の大火以前に江戸におり江戸城天守閣を遠巻きに眺めていたのかも知れない。そうであれば天守閣を想像で描いたのでもなければ、資料によつて描いたものではないということになる。このような視点から『江戸名所記』や『古郷帰江戸咄』などの図版を分析した研究があるのか分からないが、江戸時代前期の江戸城や江戸市街の復元にとって重要な作業になると思う。

先程とは逆に江戸城中心部から城外へ出て見よう。『東海道絵巻』は大手門（？）を潜り鳥が浮かぶ堀を渡る。橋を渡ったところは堀に囲まれた広場で、城に向かう行列、江戸城警護と思われる武士が並び出入口の門の辺りには馬が一頭。

この辺りは『古郷帰江戸咄』・『江戸名所記』・『東海道名所記』に描かれているが、先ず『古郷帰江戸咄』から見よう。大手門（？）の堀には鳥が浮かんでいる。大手門脇には櫓が描かれているが、『東海道絵巻』はこの図をそのまま下図として利用していると断定出来る。『東海道絵巻』には描かれていないが大手門を出た左側に「下馬」の札が建っている。

『江戸名所記』・『東海道名所記』にも大手門周辺が描かれている。

指摘するのを忘れていたが、『東海道絵巻』は全巻街道左側上空から眺めたように描いている。これに對しここで参考資料として取り上げる三点の資料はやや上から描いていることを断つておく。

さて『江戸名所記』には広場の左側から見た大手門が描かれており、門には鯢が乗っているが、『古郷帰江戸咄』には鯢は乗っていない。

『東海道名所記』は大手門やや右側から描いており、矢張り屋根には鯢が乗っている。本書と『江戸名所記』の著者は浅井了意なので当然のことである。『東海道絵巻』には鯢が描かれているので、『江戸名所記』と『東海道名所記』を参考にしたのだろうか。『古郷帰江戸咄』に鯢がないのは描き忘れたのだろうか。大手門に鯢が無いとは思えないからである。なお『東

海道名所記』には大手門の近くで天守閣を眺める本書の主人公と見られる楽阿弥らしき人物が描かれている。

以上のことから『東海道絵巻』の絵師は当時入手が容易であった三点の資料を基に江戸城とその周辺を描がいたのである。

ウ 江戸市街の描写

『一目玉鉾』に描かれた江戸市街については先に述べたが、もう一度画面を見てみることにする。『一目玉鉾』二巻の一丁目表は上部に江戸城、そして雲で仕切られ下部に江戸市街が描かれ、一丁目裏の日本橋へと続いている。

二丁目裏は雲により三段に区切られているが、各段が道筋通りに描かれているわけではなく、混乱しているような感もあるあるが、各段を繋ぎ合わせれば何とか日本橋から増上寺方面まで繋がる。ここに記されている地名等は下段が常盤橋・日本橋・神明の宮、中段は桜田・増上寺、上段は霞が関・山王・愛宕山・三田八幡である。

『一目玉鉾』を基に『東海道絵巻』を見てみよう。日本橋を渡る手前の構図は『一目玉鉾』の江戸城下段に描かれた江戸の町屋を参考にしているようである。屋根上の櫓と思われるものが二つ見える。そして日本橋へと続くが、この間の家並みを『一目玉鉾』を参考にしたとしても、具体的に描くときどのような資料を利用したのかが追求できない。筆者の知らない出版物があるのかもしれない。

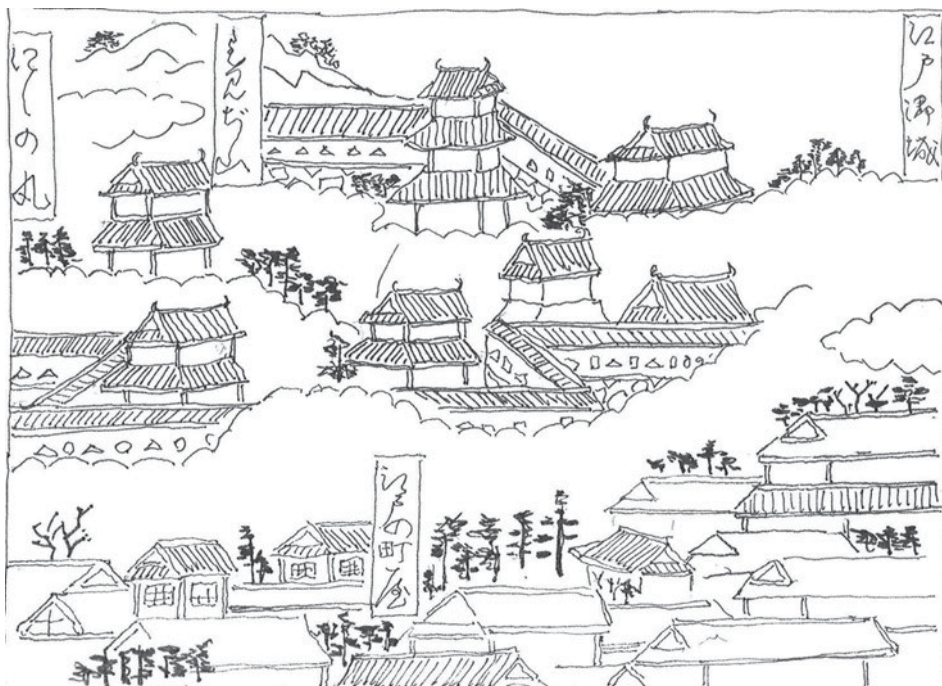
ほかに推測できるのは東海道図屏風である。屏風に依っては江戸の町屋を描いているものもあるので、当時の京都であれば所蔵している家もあり、見ることも出来たのではないだろうか。

おわりに

「おわりに」といっても毎回結論が出るわけではない。分析すること新しいことが分かり、場合によっては前回の発表を覆すことになってしまう。尤も筆者にとつてはそれが楽しみでもある。

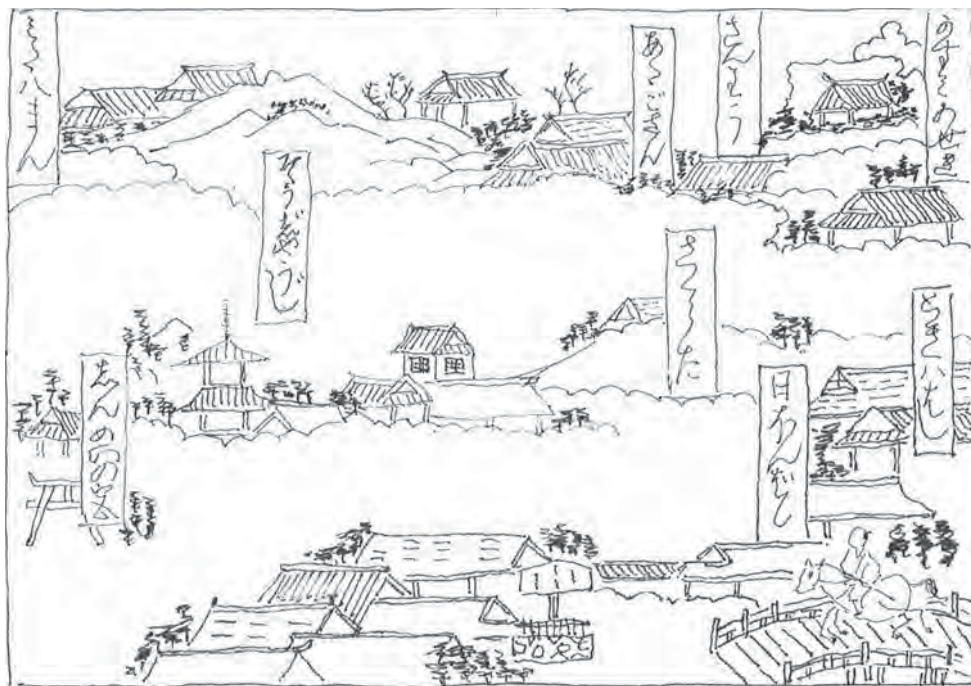
取り敢えず気にかかることは日本橋から品川辺りまでを具体的に絵にす

る時に何を参考にしたかということである。



一目玉鉾 二

(山本 写)



一目玉鉾 二

(山本 写)



江戸名所記 一
江戸御城

(山本 写)



『東海道絵巻』 郵政博物館蔵

五 江戸町家に設置された櫓の検討

(一) はじめに

前報「秋元子爵家旧蔵『東海道絵巻』(一)」は、杉山正司、山本光正、波多野純の分担執筆である。このうち、波多野「六 絵巻に描かれた江戸の町家」では、日本橋北詰から、京橋、品川宿を経て六郷橋に至る、東海道沿いの江戸の町家を建築史の視点で分析し、一部厨子二階がみられるものの大半が平屋である、土蔵以外に瓦葺きがない、卯建^{うけ}がわずかであるなどから、江戸時代初頭の町並みを示していると考えた。さらに、町家の屋根上に設置された五棟の櫓に着目し、三階櫓の前段階、時打ち櫓、火の見櫓の可能性を検討した。

いっぽう、杉山「四 制作年代の推定」は、貼紙などから描かれた事物

(以上、山本)

を詳細に検討し、貞享二年(一六八五)開創の芝間魔堂が描かれていることから、秋元子爵家旧蔵『東海道絵巻』(以下、本絵巻)はこれ以降に制作されたとした。さらに、発注者とされる秋元喬知の履歴から、宝永六年(一七〇九)以降十八世紀初めの制作と考えたい、としている。

本稿では、この杉山の指摘に導かれ、江戸の町並みを見直す。江戸の町並みは、出光本『江戸名所図屏風』(出光美術館蔵、以下、出光本)および歴博本『江戸図屏風』(国立歴史民俗博物館蔵、以下、歴博本)により、十七世紀前半の町並みイメージが共有されている。しかし、明暦三年(一六五七)の大火後、十七世紀後半から十八世紀初めの町並みをイメージする絵画史料は、ほとんど知られていない。本絵巻が、それを解き明かす史料となればと期待している。もちろん、江戸時代初頭の町並みを描いたとする当初の考えとの齟齬についても、その要因を検討する。その第一歩として、町家の屋根上の櫓について再検討する。

(二) 秋元家旧蔵「東海道絵巻」に描かれた櫓の詳細

前稿でも指摘したように、本絵巻の江戸では街道沿いの町家の屋根上に櫓が描かれており、その数は五棟に及ぶ。このような屋根上の櫓は、江戸時代後期の武家地には多数の類例があるが、町人地では管見の限り絵画史料に登場した例はなく、新たな建築類型である。

五棟の櫓の分布状況を、表1に示す。特定の地域に集中する傾向はなく、広く分布している。日本橋北詰東角㉗、日本橋南詰西角㉘、京橋北詰東側㉙はいずれも橋詰の角に近い。芝神明交差点東角㉚は交差点に面しているが、橋詰ではない。品川宿西側㉛は街道の途中であるが、交差点に面するか否かは雲により不明である。いずれの櫓も町家の屋根より突出して高く、周囲を見渡す、あるいは周囲から見られるのにふさわしい、ランドマークとなっている。

つぎに、五棟の櫓の建築上の様相を、屋根形式および屋根葺材、開口部、腰壁、床の仕上げと位置、装備について分析したものを、併せて表1に示す。

五棟の櫓は、人が乗る床部分の平面が一間角前後、高さが町家の棟から

表1 五棟の櫓の分布と様相



㊦	㊥	㊤	㊤	㊤	位置
品川宿西側	芝神明交差 点東角	京橋北詰 東側	日本橋南詰 西角	日本橋北詰 東角	
					画像
入母屋	入母屋	入母屋	切妻	切妻	形状
檜皮	檜皮	檜皮	檜皮	檜皮	材料
竹	瓦・鬼	瓦・鬼	竹	竹	棟
開放戸	開放戸	開放	開放板壁	開放	開口部
土塗	土塗	横板	土塗	簀子下見板	腰壁
?	藁	藁	板	板	材料
下る	平ら	少し下る	平ら	平ら	床高
太鼓・鉦	太鼓	太鼓	?	太鼓	装備
一人	一人	一人	二人	二人	人物

櫓の棟まで八尺から十尺程度と共通し、規格化された規模である。建築としての仕様も一応統一されているが、細部には幅がある。

まず五棟とも、町家の屋根棟を跨いで建ち、柱は袴腰状に下部が開いている。屋根葺材は、いずれも当該町家の屋根と同じ檜皮である。²⁾ 屋根形状は、㊦・㊥が切妻、㊤・㊤・㊥が入母屋である。さらに、棟部分を見ると、㊦・㊥・㊥では割竹を伏せるなど簡単な仕様であるのに対して、㊤・㊥では瓦を積み、端部には鬼瓦を置く。屋根仕様でみる限り、㊤・㊥は上等である。架構は袴腰の四本柱を基本とするが、㊥・㊥では妻面にさらに柱が一本（対応する反対の妻面にもあれば二本）追加されている。さらに、㊥では一部に板壁が付く。この板壁が何を意味するかは不明であるが、監視が全周ではなく方向性があるとすれば、山本の指摘する「橋を見張る」可能性がある。³⁾ 開口部は開放されているが、㊥・㊥では、戸締りと日除け、雨除けになる揚げ戸が付く。開口部下の腰壁は、㊥は簀子下見板張り、㊤は横板張り、㊥・㊥・㊥は土壁である。内部の床は、塗色の濃淡から判断すると、㊥・㊥は板敷き、㊤・㊥は莫塵あるいは薄縁敷きで、開口部の敷居とはほぼ同じ高さに床が設けられ、人物が座っている。いっぽう、㊥では床が下り立位の人物が窓台（開口部の敷居）に肘をつけて外を見ている。装備をみると、㊦・㊥・㊥・㊥には太鼓が吊られ、さらに㊥には鉦が吊られている。㊥はよく分からない。

以上みてきたように、五棟の櫓は規模・仕様・装備がほぼ共通することから、幕府の規定に基づいて建設されたものであり、共通の役割を持つと考えられる。いっぽう、後に検討する仮設あるいは移動可能性を建築仕様からみると、腰壁が板張りの㊦・㊥であれば一度解体して別の場所で再建することは容易であるが、土塗りの㊥・㊥・㊥では、かなり困難である。⁴⁾

(三) 町触からみる櫓建築とその機能

繰り返しになるが、前報では五棟の櫓について、三階櫓の前段階、時打ち櫓、火の見櫓の可能性を検討した。三階櫓の前段階と時打ち櫓は、江戸時代初頭であれば可能性があるが、十七世紀後半から十八世紀初めに存在

する可能性はない。

三階櫓は、出光本・歴博本に描かれており、十七世紀前半の町並みの特徴のひとつである。瓦葺きに白漆喰塗りの外壁をもつ城櫓風の建築であり、簡便な仕様の本櫓との連続性はない。また、慶安二年（一六四九）二月十五日の町触に「三階仕間敷事」とあり、三階櫓は明暦大火で焼失した後には存在しなかった。⁶⁾

時打ち櫓については、寛永三年（一六二六）、鐘撞役人辻源七に本石町三丁目の土地が与えられ、鐘樓を建て、鐘により時刻を報せる業務を開始しており、⁷⁾それ以降であれば、太鼓を備えた櫓で時刻を報せた可能性は低い。

そこで火の見櫓に絞って、屋根上に設置された建築について検討する。まず、天和三年（一六八三）正月の町触に、

風烈時分ハ、壺町之内壺式ヶ所宛、昼夜屋根人^江を上ヶ置、火之用心可致者也 正月十二日 町年寄三人 右は家根番之初り⁸⁾

『江戸町触集成』二〇四四とあり、風が強い日には従来の自身番・中番に加えて、「家根番之初り」とあるように、この時から屋根の上へ番人を上げる火災監視対策が強化された。

さらに、貞享三年（一六八六）二月二九日の町触に、

一町中番明朔日より御赦免被成候間、無用ニ可仕候、やねノ上人を上ヶ置候儀ハ、来月中差上ヶ可申候、尤町中火之用心之儀かたく相守可申候、町中不殘可被相触候、 町年寄三人

『江戸町触集成』二四二三とあり、冬期間には、中番と同様に屋根上の番人も常置で、屋根上の番人だけさらに期間が延長された。しかし、そのための施設があったか否かは明かでない。

さらに、同年五月十九日の町触に、
火見矢倉之儀、喜多村殿^江名主衆御呼付候、御赦免被成候由被仰付候、併風吹候は上ヶ置可申旨被仰付候 『江戸町触集成』二四六〇とあり、「火見矢倉」を設置し番人がおかれた。さらに、同年九月二八日

の町触に、中番を十月朔日から夜間おくとともに、十一月朔日から翌年二月晦日まで昼夜おくことが例年のように指示されるとともに、

火之（見）屋くらニ番置候儀、来月中ハ風吹候日斗差置可申候、十一月より昼夜差置可申候 町年寄三人 『江戸町触集成』二四九三とあり、「火之見屋くら」つまり櫓形式の施設があり番人を置いていたことが再確認されている。さらに十一月二六日の町触に、

風つよく吹候間（中略）辻番中番火之見番之者共、火之用心切々相触可申旨、町中不殘可被相触候、以上 町年寄三人

とあり、辻番・中番と「火之見番」が役務を示す職名として併記されており、「屋根番」の経費が計上されている。⁹⁾

以上のように、「火見番」¹⁰⁾・「屋根之上番人」¹¹⁾・「火之見やくら番人」¹²⁾・「屋根番」¹³⁾など職名はさまざまであるが、屋根の上に番人を置くことが冬期およびその他の季節の風の強い日に定着するとともに、屋根上に火の見櫓が建設された。

また、翌四年十一月十八日の町触に、

屋根番 弥昼夜共ニ無油断差置、少煙立候とも早速知せ可申候、見そこない候分ハ不苦候、少之儀ニ^而も町中^江為知候様、番人堅可申付候

とある。屋根番の役割は、火災の早期発見と通報である。「見そこない候分ハ不苦候」とは、煮炊きの煙などとの誤認を許容するので早期発見に努めよ、との意味である。

その後、享保改革の一環として町方の消防制度が整備された。享保四年（一七一九）八月には、

去戌十月より町火消、壺町二付三拾人宛被為仰付候二付（中略）当御地町並所々二場所見合借宅仕、都合五拾五ヶ所会所相建、右借宅之屋根^江火之見を上ヶ

とあるように、火の見櫓の設置は各町の町会所の屋根上と定められた。火の見櫓の規模は、享保八年八月の町触に、

町々火之見之高サ、町家屋根棟より火之見棟迄九尺二定、式町程見通候積り町々申合、絵図之通、喰違二火之見上可申候、

『江戸町触集成』五八八九とある。「火之見棟」とあることから、梯子状の粋火の見ではなく、屋根のある火の見櫓である。「町家屋根棟より火之見棟迄九尺」とする高さ規定は、前に述べた本絵巻の櫓の規模とよく一致する。また、内容としては溯る記録であるが、

元禄一三辰年之頃迄は、家主居宅の屋根に取置に拵置、四月より四月迄年番にて、家主六人の者の方へ、右櫓持はこび候処、享保年中に塗屋作り被為仰付候故、其上火事場人足欠付組合被為仰付候故、八丁堀、茅場町、坂本町百組と相極、火消相勤候、依之、火見櫓、茅場町鎧の渡揚場に角相建申候

『坂本町旧記』享保十一年条(『新修日本橋区史』所収)とあり、櫓は家主居宅上に設置され、四月を境に一年ごとに移動したとされる。本絵巻に描かれた五棟の櫓の移動可能性についてはすでに検討したが、仕様によっては可能である。また、町家の不燃化、町火消の組織化が進んだため、火の見櫓も数町がまとまって一ヶ所に建設するようになった。時間軸は前後するが、享保五年(一七二〇)八月の町触にも、

其町々壱町ニ壱ヶ所宛、火之見櫓差置候様ニ古来被仰付候ニ付、今以壱町ニ壱ヶ所ツ、有之候、(中略)左右式町宛四町四方之中ニ、私共入用を以櫓壱ヶ所、只今迄有来り候より少シ高く建置、壱ヶ所ニ番人三人宛差置(中略)町々八町四方ニ火之見を壱ヶ所宛相建

『江戸町触集成』五六六九とあり、町方の負担軽減のため、火の見櫓は八町に一ヶ所に減らされた。さらに火事の発見は広小路などに独立して建つ大規模な火の見櫓、近火の周知は自身番屋の屋根上に設置された粋火の見と役割が整理された。この経過のなかで、町家の屋根上に建つ火の見櫓は順次消えていった。

つまり、本絵巻に描かれた町家上の櫓は、十七世紀後期から十八世紀前期にのみ存在した町方の火の見櫓である。

(四) 伝達機能の検討

本絵巻に描かれた五棟の櫓のうち四棟には太鼓が吊られている。また、一棟には太鼓に加えて鉦が吊られている。五棟の櫓が、出火を見張り通報する火の見櫓であるとする、どのような手段で通報したかが問題になる。宝永五年(一七〇八)九月九日の町触に、

祭礼其外之儀を町中^江告知候ニ付、太鼓を打廻り候儀、火事太鼓と紛敷

『江戸町触集成』四一七六「火事太鼓」とあり、火事の周知に太鼓が用いられたことが確認できるが、定火消など武家方のものか町方の火の見櫓のものは、分らない。

火事発見から通報までの段取りを、享保八年(一七二三)八月の町触をもとに整理すると、

火之見近所ニ風見喚鐘釣置、火之見番人兩人定置、風有之喚鐘鳴候ハ、壱人之番人は火之見^江上り可罷有候、残ル壱人ハ火之見番上候段、町中^江為相知可申候

『江戸町触集成』五八八九とあり、風の強さを測る風鈴(風見喚鐘)が鳴る風の強い日には、番人の一人が火の見櫓へ上がつて監視し、もう一人が火の用心を町内に触れ歩いた。さらに、出火を発見した際には、

出火有之は、板木ニ^而為知可申候
『江戸町触集成』五八八九とあり、板木を叩いて知らせていた。しかし、同十七年十一月八日の町触には、

町中火之見櫓之半(喚)鐘相止、板木ニ可仕候

『江戸町触集成』六二五五とあり、伝達手段は板木ではなく喚鐘であり、それが板木に変わったとある。さらに、同十九年二月十六日には、町方から以下のように願ひ出ている。

火之見櫓為知之儀、先年より喚鐘ニ^而有之候所、去ル子十一月より盤木ニ被仰付、相聞不申候ニ付、其後御願申上候得ハ、鉦ニ被仰付候、然共聞え兼候故、出火之節、人足等不揃ニ付町々迷惑仕候、尤夜更之節為知聞え兼、人足不揃ニ^而ハ及大火ニ可申と奉存候間、先年之通、

喚鐘懸ヶ置、為知為打申度、町々一同二奉願候

『江戸町触集成』六三一二

これからも分かるように、火の見櫓から町火消しの人足へ火災を周知する手段は、喚鐘、盤木（板木）、鉦と揺れながら最終的に喚鐘に戻っており、安定せず多様であった。このような状況は武家方も同じで、嘉永七年（一八五四）正月の町触に、

当分之内出火之節武家方^二而盤木は不相用、太鼓又は半鐘相用候間、是迄とは事替り候迎、於市中騒立候儀決^而致間敷候

『江戸町触集成』一五五三〇

とあり、板木を太鼓や半鐘に変えている。

本絵巻に描かれた五棟の町家屋根上の火の見櫓では、そのうち四棟に太鼓が吊られている。太鼓が大名火消しや定火消の火の見櫓に用いられたことはよく知られているが、町方でも太鼓が用いられた時期があったとすれば、新たな発見である。

（五）おわりに

以上のように、本絵巻に描かれた五棟の櫓は、出火を発見し周知するために屋根番が詰める火の見櫓である。屋根番は天和三年（一六八三）にはじめて町方の職務として設置され、屋根番が勤務する町家屋根上の火の見櫓は、貞享三年（一六八六）にその設置が確認される。火の見櫓には、「町家屋根棟より火の見棟迄九尺」と規模規定があり、仕様もほぼ統一されていた。その後、享保改革期における町火消しなどの整備過程で火の見櫓も整理統合され、町家屋根上の火の見櫓は姿を消した。つまり、本絵巻に描かれた火の見櫓は、十七世紀後期から十八世紀前期のきわめて限られた時期にのみ存在した建築形態である。

このように描かれた櫓建築が、十七世紀後期から十八世紀前期に限られた建築形態であるとすれば、町並みもまた同時期である可能性が高い。では、なぜ前報において江戸時代初頭の可能性を指摘したのであろうか。江戸の都市景観を描く絵画史料としては、景観年代が十七世紀前半と考えられる出光本と歴博本が知られている。いっぽう、十九世紀前半の都市景観

を描いた絵画史料としては、『江戸一目図屏風』（津山郷土博物館蔵）、

『歴代照覧』（ベルリン東洋美術館蔵）、『江戸名所図会』など豊富である。

また、関東近郊に視野を広げれば、店蔵など江戸風の建物も残っている。

ところが、この間の十七世紀後期から十八世紀の江戸の都市景観を描く絵画史料は少ない。¹⁴その空白期間を、町並みは連続性をもつとの認識で埋めてきたのではなからうか。¹⁵歴博本に描かれた町並みが整理統合され十九世紀の町並みが形成されたと考えてきたが、一度見直す必要がありそうである。歴博本に描かれた三階櫓、瓦葺きの普及、本二階屋などの特質を、江戸の独自性の萌芽として捉えてきた。しかし、江戸の優位性を強調するために、日本橋周辺の先進的な町並みを、江戸全体に敷衍して描いたのではなからうか。

それが明暦大火で失われた時、復興された町並みは、歴博本に描かれた大火前と同質のものであったのだろうか。前述のように三階櫓は再建されなかった、倉庫以外の瓦葺きは禁止された、¹⁶などから考えると、復興された町並みは、大火前とは断絶したおとなしいものであったか、あるいはそのおとなしい町並みこそが大火前と連続性をもつか、本絵巻を起点に再検討する必要がある。その後、八代將軍吉宗の享保改革期の瓦葺きの奨励・強制など防災都市政策により、十九世紀以降の町並みの基礎が作られたと考える方が、納得が行く。

- 1) 金行信輔『写真のなかの江戸』（ユウブックス、二〇一八）など幕末の写真には、大名屋敷屋根上の火の見櫓が多数紹介されている。
- 2) 似た屋根葺材に、柿^けや長板がある。描法から、細かい横線で濃色のものを檜皮、粗い縦横の線で薄色のものを柿や長板と判断した。
- 3) 前報、山本「五 絵巻の考察」では「日本橋手前、街道左側の家の屋根上に櫓が描かれている。京橋手前も同様である。これは橋を見張るためなのだろうか」としている。
- 4) 「上州高崎城主松平右京亮殿表広間火の見櫓図」（都立中央図書館蔵、波多野純『城郭侍屋敷古図集成 江戸城Ⅱ（侍屋敷）』至文堂、一九九六に図版掲載）は、大名屋敷の屋根上に設けられた火の見櫓の立・断面図で、部材を栓で止

めるなど解体・組立が容易な構造となっている。

5) 江戸橋広小路の床見世百七軒は、將軍御成の際などは撤去する仮設建築であったが、享保五年(一七二〇)には、そのうち五二軒に塗屋作りが許可された。

このような事例からも、仮設建築の常設化が進行したと思われる。波多野純「江戸橋広小路の変遷と復原」国立歴史民俗博物館研究報告 第十四集、一九八七近世史料研究会編『江戸町触集成』塙書房、通し番号二五

6) 浦井祥子『江戸の時刻と時の鐘』岩田書院、二〇〇二

「石は家根番之初り」の部分は、『撰要永久録』による追記である。

7) 貞享三年十一月廿八日『江戸町触集成』二五二三

8) 貞享四年正月二日『江戸町触集成』二五三三

9) 貞享四年二月廿九日『江戸町触集成』二五五四

10) 貞享四年九月廿八日『江戸町触集成』二六一三

11) 貞享四年十一月十八日『江戸町触集成』二六三〇

12) 浦辺家本『江戸図屏風』浦辺繁治氏蔵、渡部家本『江戸図屏風』(諏訪春雄・

13) 内藤昌『江戸図屏風』毎日新聞社、一九七二

14) 平屋から二階屋へ、板葺きから瓦葺きへなどを発展・整備過程と捉える近代

15) 的発想を再検討する必要がある。

16) 瓦屋の事、国持大名といふともとくるべからず、但倉廩はくるしからずと令

せらる 『嚴有院殿御実記』明暦三年(一六五七)二月晦日条

(以上、波多野)

(すぎやま まさし 埼玉県立文書館元館長、

やまもと みつまさ 交通史学会元会長、

はたの じゅん 日本工業大学名誉教授)

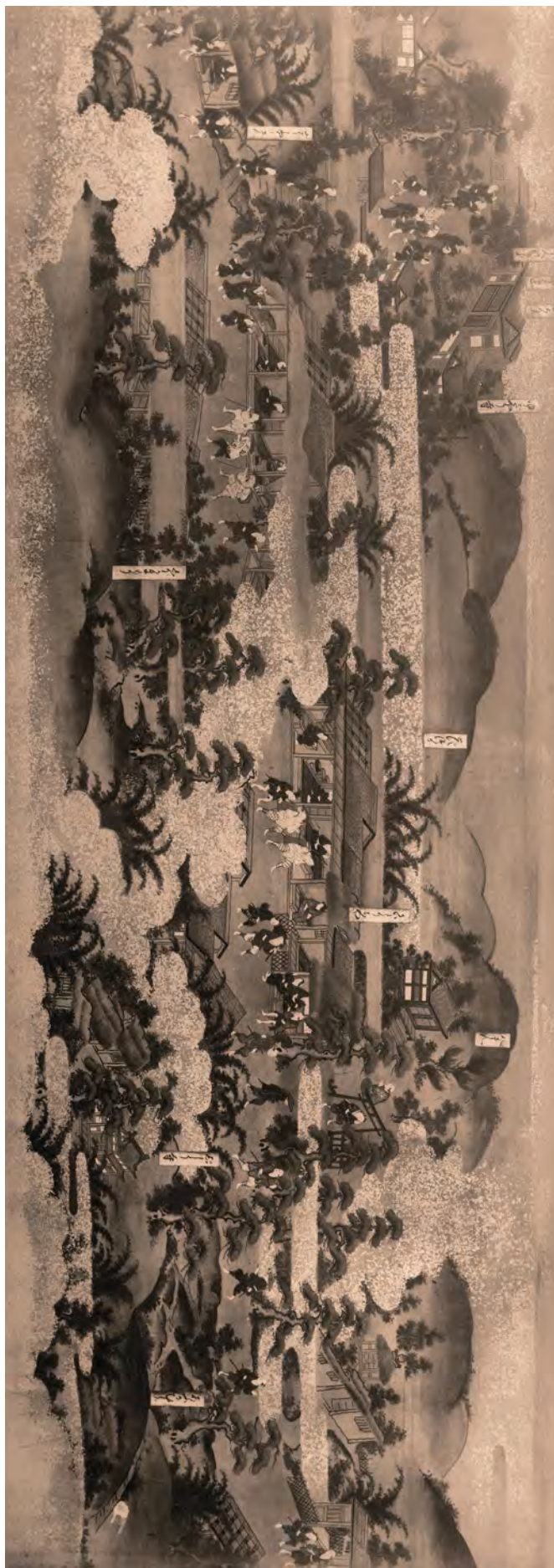
「東海道絵巻」(第8紙～第20紙)



第8紙 神奈川宿



第9紙 新町 (保土ヶ谷宿)



第10紙 戸塚宿



第11紙 藤沢宿



第12紙 平塚宿・大磯宿



第13紙 鳴立沢・相模国府



第14紙 酒匂川



第15紙 小田原宿



第16紙 箱根関所



第17紙 三島宿



第18紙 三島大社・黄瀬川



第19紙 沼津宿・原宿



第20紙 吉原宿・富士山

※各紙名称は画中の主要箇所を便宜上つけたもので正式なものではない。